ドストエフスキイ研究会便り（２４）

★『罪と罰論』の出版(2007)に先立つ１０年ほど、私はこの作品について様々な試行(思考)錯誤・デッサンを繰り返していました。本論はその一つで、ロシア文学会の共同研究会(1998)で発表をした後、なお検討を続け、最終的に文章化(2001)したものです。

★『罪と罰』(1866)と言えば、ラスコーリニコフの「ナポレオン理論」が余りにも有名であり、読者の注意は、この青年と彼の理論に関心を持った予審判事ポルフィーリィとの対決に、またニヒリスト・スヴィドリガイロフとの対決に集中する傾向があります。しかし娘のソーニャを娼婦の身に追いやってさえ、なお酒の魔力に勝てず、「もうどこにも行き場がない」と呻きつつ、「最後の審判」での救いを夢見る卑劣漢マルメラードフ。またこの父親によって地獄の底に突き落とされながらも、キリストへの信と愛を保ち、遂には「死せるラザロ」ラスコーリニコフを地獄から救い出すソーニャ等々 —— 至る所に我々読者の心を鷲掴みにする魅力と魔力を持つ人物たちが登場するこの作品は、人間と世界とその歴史、更には超越世界についての思索を促す問題性に満ち、遺作『カラマーゾフの兄弟』(1880)と並んで、正にドストエフスキイの最高傑作と言うべきでしょう。

★この『罪と罰』と取り組んでいる内に、私はラスコーリニコフがペテルブルクへの上京後、ザルニーツィナ婦人の許に下宿をし、直ちにその娘ナターリヤと婚約をしたこと、そして二年後の婚約者の死後、彼が「ナポレオン理論」にのめり込んでいったこと、これらの事実の背後に作者ドストエフスキイは如何なる意味を込めたのか、非常に気になり始めました。金貸しの老婆を殺害するに至る前に、またソーニャと出会う前に、ラスコーリニコフはこの下宿で、婚約者ナターリヤとの間に如何なる「春の夢」を育んでいたのか？—— テキストの検討を続ける内に、私にはドストエフスキイが、この下宿生活に深い奥行きと拡がりを与えていることが見えて来るように思われました。

★今回と次回は、ラスコーリニコフの下宿空間と、下宿の娘ナターリヤとの婚約の意味について、以前行った基礎的なデータ収集の作業と、その上に立った考察を取り上げます。最初これらは研究発表や小講演の形で発表したもので、とりわけ今回は基礎的な分析が中心で、記述も素っ気なく、今からすれば別の角度からのアプローチや表現もあり得たかと思うのですが、これもまた『罪と罰』との長い格闘の記録として私には懐かしく、またテキスト分析もある程度厳密になされていると思われるため、ここに再録することにしました。皆さんも楽しみながら、ラスコーリニコフの下宿空間に込められた「謎」の解明に挑み、改めて『罪と罰』の世界の奥深さを知る契機として頂ければ幸いです。

『罪と罰』、隠された女神たち

― ラスコーリニコフの下宿空間をめぐって ―

芦川 進一

目次　　ページ

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

1. テキスト①・創作ノート①・・・・・・・・・・・・・・・３

2. テキスト②・創作ノート②・・・・・・・・・・・・・・・４

3. テキスト③・創作ノート③・・・・・・・・・・・・・・・６

4. テキスト④・創作ノート④・・・・・・・・・・・・・・・７

5. テキスト⑤・創作ノート⑤・・・・・・・・・・・・・・・９

《考察》　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０−１３

次回の「ドストエフスキイ研究会便り（２５）」について ・・・１４

《参考資料》「善きサマリア人の譬」― ルカ福音書から ― ・・・１５

★本論は、前頁冒頭に記したように、ロシア文学会の共同研究の報告書『論集ドストエフスキーと現代』（多賀出版、2001）に掲載された論考「『罪と罰』、隠された女神たち ― ラスコーリニコフの下宿空間をめぐって ― 」を再掲載するものです。その原型は『スラブ学論叢』（北海道大学文学部ロシア語ロシア文学研究室年報・第３号（２）、1999）に掲載されました。これら二つの元になった共同研究の発表の場では（1998）、「ナターリヤ母娘のつくる下宿空間 ―「棺」の内なる「春の夢」―」と題して、専らテキスト分析、つまり基礎的データの収集・整理に努め、ラスコーリニコフの下宿空間に関するデッサン的考察を試みました。

本論では発表時の「ナターリヤ母娘」を、「隠された女神たち」として考察を進めていますが、基本的に発表時と内容的な違いはありません。文章は、表現が錯綜した部分を交通整理し、誤植の訂正と表記の統一を図りました。なお[★]印をつけた部分には、今回新たに、欄外に活字を下げて説明を加えました。

『罪と罰』、隠された女神たち

― ラスコーリニコフの下宿空間をめぐって ―

はじめに

『罪と罰』には、わずかずつだが、そこここにラスコーリニコフの下宿先の娘で婚約者のナターリヤと、その母親ザルニーツィナ婦人について言及がなされている。この母娘は『罪と罰』を論ずる際、その情報の少なさもあってか、今まで殆ど等閑に付されて来た。しかし、ひとたび彼女らに焦点を当てると、ドストエフスキイがこの作品の内に、密かにしかも周到に配置した「女神」たち、あのソーニャと相俟って、殺人者ラスコーリニコフを「光」に導く隠れた市井の「女神」たちの姿が浮かび上がってくる可能性もある。紙面の制約上ここでの作業は、まず『罪と罰』の**「テキスト」**と**「創作ノート」**を資料とし、ナターリヤ母娘に関するデータを集め、整理することを第一とする。

《凡例》

資料は**「テキスト」**も**「創作ノート」**も共に①～⑤に分け、**【状況**（の説明）**】**の後に、◎印で、筆者が収集・整理したデータを示す。（　）内の**漢数字**と**アラビア数字**は３０巻本全集の巻数とページ数である。これらの後には**《メモ》**を付し、それぞれの問題点を指摘する。①～⑤が終わって、最後の**《考察》**（１０-１３ページ）では、それまでに浮き彫りとなった問題点について、今後の考察への「叩き台」となるべき視点を、改めて二～三提示したい。[ ]や[★]は筆者の**注記**だが、後者は今回の付加である。

1.

「テキスト」①　　第二部・１章（六８０－８１）

【状況 ―― 老婆殺害の翌日。ラスコーリニコフは警察署出頭の命を受け出頭する。しかし、下宿のおかみ・ザルニーツィナによる「借金支払いの請求」と判明。安心した彼は多弁になり、副署長を相手に身の上話を始める**】**

◎自分は三年前[★]上京し、ここに下宿するや、「そもそもの始めから」下宿のおかみの娘と結婚の「口約束」をした。彼女のことを「ぞっこん」という程ではなかったが、「気に入っていた」。当時、下宿のおかみからは相当の借金をし、いい気な生活をしていた。軽薄だった。婚約者は、一年前[★]チフスで死んでしまった。

「創作ノート」①　　（七２４－２５）

【状況は「テキスト」①のデータとほゞ同じ。**内容**は、以下やや異なる所のみを記す**】**

◎田舎から出るや、ここに下宿をし、もう二年[★]になる。すぐに、下宿のおかみの娘と婚約をした。「ぞっこん」とまではいかなかったが、この婚約は完全に「自分の意志」からのものだった。

《メモ》ラスコーリニコフの大学時代の「生活史」の枠が浮かんでくる部分。「上京」の後、「下宿」から「婚約」への速やかさが、二人の性格や出会いのユニークさを浮き彫りにしていると言えよう。婚約者とその母親が生み出していた空間の快適さも想像される。更にナターリヤとの婚約の速やかさと共に、彼女の死の迅速さにも注目すべきである。

[★]

[「創作ノート」の「二年」は、「テキスト」では「三年」である。前者は作者の勘違いと思われる。本稿のデータだけでは、主人公の上京後の生活史が分かり難い。先に最終「テキスト」から、時系列的な関係に下線を付し、簡単に整理しておく。

――― 上京後、ラスコーリニコフは直ちに下宿の娘ナターリヤと婚約をする。しかしナターリヤの腸チフスによる死で、婚約生活は二年後に終わる。ラスコーリニコフが故郷の母に彼女との結婚話を告げるのが、婚約から一年半後、母と妹の上京による家族の再会が、それからまた一年半後で、ラスコーリニコフの上京からは三年後となる。ナターリヤの死後もラスコーリニコフは、ザルニーツィナ婦人が引っ越しをしたにもかかわらず、この下宿を離れず、次第しだいに自分の内に引き籠るようになってゆく。恐らく「ナポレオン理論」に向かったのであろう。そしてナターリヤの死から一年後、彼は金貸しの老婆殺害に向かうのだ。

→《考察》も参照(１１－１２ページ)]

2.

「テキスト」②　　第二部・３章(六９７)

【状況 ――警察署への出頭後、前後不覚に陥るラスコーリニコフ。その彼を数日看病した友人のラズーミヒンは、この間召使のナスターシャと軽口を交わし合う仲となるばかりか、下宿の主婦ザルニーツィナの魅力も発見し、彼女との間に「ハーモニィ」を打ちたてる。彼は自分が得た情報と推測をラスコーリニコフにぶつける】

◎婚約者ナターリヤの死後、ラスコーリニコフは大学をやめ、バイトをやめ、着るものもなくなる。部屋に閉じ籠り、以前とはガラリと変わってしまった。このような「元花婿」のラスコーリニコフに対して、おかみは最早「親類付き合い」の必要を

感じなくなり、借金の取り立ての方向に気持ちが向かったのだろう。

【このラズーミヒンの観察と推測に対する、ラスコーリニコフの答え】
◎僕は、田舎にいる乞食もしかねない母を見かねて、おかみに嘘をつき、居候を計ったのだ。卑劣だった。

「<u>創作ノート」②</u>　　（七５１）
【状況も**内容**も、「テキスト」②とほゞ同じ。筆者のデータ整理は省略する】

《メモ》ラズーミヒンが鋭敏にも明らかにした、下宿空間の特殊性に着目したい。おかみの「風変りさ」、つまり女としての大きな魅力と、その一方でロマンチックかつプラトニックな堅物ぶり —— ラスコーリニコフは上京するや、このようなユニークな女性が「おかみ」を務める家に下宿をし、直ちにその娘と婚約をしたのだ。彼が大学生活を送ったこの下宿の性格について、しっかり考える必要があろう。また、二年後の婚約者の死を契機として、ラスコーリニコフがそれまでの姿から激変することにも注目。恐らく「ナポレオン理論」[★]に没頭していったのだと思われる。いわゆる「棺」としての下宿生活が、ここに始まったのだ。乞食同然の母のため、不本意ながらも亡き婚約者の家に「居候」を続ける彼の心境も考慮に入れておきたい。ザルニーツィナへの借金は、田舎の母のためだったのか？ この点も検討の必要があるだろう。[ラズーミヒンが下宿の主婦ザルニーツィナについて語る場面は、ここに詳細は取り上げていないが、『罪と罰』の中でも生気溢れる出色の場面として注目したい]

[★]
「ナポレオン理論」とは、人間と世界とその歴史について思索を重ね、ラスコーリニコフが至った次のような結論である。——— 人類の歴史を支配するのは、ごく少数の「ナポレオン」たちであり、他の圧倒的多数の人間は、彼らの恣意と暴力によって左右され、ただ消費されるだけの「素材」でしかない。
　ここからラスコーリニコフの思考は悪魔的・悲劇的方向に進んでゆく。—— では、この自分は果たしてナポレオンなのか、虱でしかないのか？　この問いへの答えを求め、彼は金貸しの老婆を殺害するに至るのだ。
　今回と次回は作者ドストエフスキイが、ラスコーリニコフの「ナポレオン理論」が育まれた一つの背景を、下宿先の娘ナターリヤとの婚約と交流の内に置いているのではないか、そしてこのナターリヤが、やがて彼を地獄から救い出すソーニャの前身としての役割を持つのではないか —— このような視野の下に、「テキスト」と「創作ノート」から様々な情報を集め、分析・考察をする作業である。

「１８１２年、モスクワのナポレオン」（Napoléon à Moscou en 1812）
マズーロフスキイ画、モスクワ・国立歴史博物館（“DOSTOÏEVSKI”、Hachette、1971）

3.

「テキスト」③　　**第三部・２章(六１６６－１６７)**

【状況 —— 上京した母と妹。不調に終わった久しぶりの再会の翌日、改めてラスコーリニコフと会う前、二人はラズーミヒンと話し合う。二人がぶつける不安に対して、この青年は精一杯の好意を以って答える】

◎【母】 あの子は、十五歳の頃から手に負えない子でした。ふいに思いもよらぬことを始めかねない子だったのです。一年半前にも結婚話を持ち出し、死ぬ思いをさせられました。

【ラズーミヒン】 この結婚話に、花嫁の母は乗り気ではなかったようです。噂では、花嫁の器量は「醜く」、「病気がち」の「変わり者」だったようです。[このような否定的な情報ばかりですが]一方で、彼女には何か「然るべきもの」も存在したようです。

【妹ドゥーニャ】 私も、兄の婚約者は「然るべきもの」のある方だったに違いないと

思っています。

「<u>創作ノート」③</u>　（1）七８２　（2）七１３３　（3）七２１２

【状況―― 「創作ノート」には、「テキスト」③と対応する基本的な状況設定はない。しかし「創作ノート」の各所に、関連テーマと思われる言及は散見されるので、以下に（1）・（2）・（3）として収録しておく**】**

◎（1） 恋について。婚約者についての「滑稽な」、そして「胸を打つ」描写を（簡潔に）

（2）【母】あの子は、以前[ナターリヤとの]結婚話で私を悲しませた上に、今もまた、あの女[ソーニャ]との結婚を持ち出しています。

（3） 【ラスコーリニコフ、母に対して】悲しみの他にはあなたに何も[あげなかった]。覚えていますか？ 僕が結婚しようとしたことを？

《メモ》先の②に加えて、ラズーミヒンのバランス感覚がここでも発揮される。つまり彼は、ナターリヤについての否定的な情報[「醜さ」とか「病弱」とか「風変りさ」]を伝えると共に、「然るべきもの」[ダストーイノエ]という語を使って、二人の婚約の背後にあった肯定的な何ものかの存在を、好意的に推測するのだ。

「創作ノート」（1）の記述と、「テキスト」③に於けるラズーミヒンの認識とが対応することに注意。「創作ノート」（1）では、婚約者について「滑稽さ」と「胸を打つもの」というアムヴィバレンツの存在が言及されているのだが、これを「テキスト」③に於いて、ラズーミヒンが具体的に証言していると考えられる。

また、妹のドゥーニャも、彼に賛成して「然るべきもの」の存在を推測している。[やがて結婚する]ラズーミヒンとドゥーニャとは、ラスコーリニコフの価値を知り、彼を信頼し、彼への好意を貫く存在である。ドストエフスキイは、この作品全体のバランスの保持者として、二人を描いていると言えよう。

4.

「<u>テキスト」④</u>　第三部・３章（六１７７－１７８）

【状況 ――③の会話の後、再び下宿を訪れた母と妹とラズーミヒンに対して、ラスコーリニコフは婚約者ナターリヤの思い出を語る**】**

◎ ナターリヤは病弱な女性で、乞食への施しを好んでし、修道院を夢見ていた。この修道院の話をした時、彼女は一度など涙まで流したことがあった。

◎ 器量は悪かった。自分が惹かれたのは、彼女が病弱だったからだろう。更に彼女が「びっこ」か「せむし」[原文ママ]だったならば、もっと惚れていただろう。

◎ 要するに、これは「春の夢」だったのだ。

「<u>創作ノート」④</u>　　（1）七１７５　　（2）七２１０

【状況――「テキスト」④とほゞ同じラスコーリニコフの言葉が存在する。しかし具体的な状況は書かれていない。（1）七１７５の方は**Ｎ・Ｂ**の形で存在する**】**

◎ （1）**【**「テキスト」のデータに加えて、ナターリヤの性格を表現する形容詞が二つ**】**
[彼女は]とても「へりくだって」「謙遜で」[後述]（修道院を夢見ていた・・・）。
【美人だったの？という妹の質問に対して**】**いや、まあまあだ。だって人が若い内は、一体誰が醜いということがあり得ようか？！

◎ （2）**【**母に対して**】** 覚えていますか？ 僕が結婚しようとしたことを、せむしの女の子と。

《メモ》ラスコーリニコフが郷里の母と妹にナターリヤとの結婚のことを知らせたのは、婚約から既に一年半が過ぎた後のことだった[③]。この一件は一方的な告知のまま放置されていて、皆の心に「しこり」のように伏在し続けていたのだろう。気まずい雰囲気の中で、突如ラスコーリニコフはこの問題を持ち出し、母と妹にむしろ自虐的な報告をする。考えてみれば、三年間の別離の間に、彼はペテルブルクでもう一つ別の家族の住人となって「春の夢」を見ていたとも言い得るのだ。母と妹を前にした彼は、既に婚約者の死と二人の殺害を体験し、「今浦島」のような思いを抱きつつ、自らの婚約者について報告をしたのだろう。

なおここで、ナターリヤを理解する上での二つの大きなカギが明らかにされる。一つは、彼女が「乞食」への施しを好み、「修道院」入りを願っていたこと。またこの宗教的志向性と対応する形で、彼女の内面的な性格が謙抑なものであったことが、二つの形容詞（「へりくだった」[プリニージェンナヤ]「謙遜な」[スミーレンナヤ]）で明らかにされる。

他の一つは、彼女の外見の容姿の「醜さ」に加えて、肉体的なハンディ（「せむし」・「びっこ」）までもが強調されることだ。

これら二つは共に、典型的なドストエフスキイ的磁場における宗教性の表現と言えるであろう。ソーニャの下宿先であるカペルナウモフ[イエスのガリラヤでの活動の本拠地。→ マルコ福音書一２１、二１他を参照]の家と似た福音書的磁場が、ここには強く意識されていると思われる。「乞食」とか「びっこ」とか「せむし」とか「へりくだった」とか「謙遜な」とか・・・ナターリヤという存在は、ソーニャと共に（正確には、ソーニャの前に）、ラスコーリニコフに対して福音書的磁場を用意し、そこでイエスと神とを指し示す「市井の女神」の役割を担った存在であったことが推測される。

5.

「テキスト」⑤　　第六部・７章（六４００－４０１）

【状況 —— 自首直前のラスコーリニコフの部屋で。妹ドゥーニャとの別れの場面**】**

◎ ラスコーリニコフは埃だらけの分厚い本から、象牙版に描かれたナターリヤの肖像画を取り出す。「この上なく風変りで、修道院行きを夢見ていた」彼女の「表情に富んだ病的な顔」にしばらくの間見入っていた彼は、それからこの肖像画に接吻をし、ドゥーニャに託す。

◎ その後、彼は妹に打ち明ける。「あの人と、あのことをも多く語り合ったんだ。あの人とだけで」。「心配は無用だ。あの人は賛成などしなかった」。

「創作ノート」⑤　　（1）七１７６

【状況——「テキスト」⑤とほゞ同じ。先の「創作ノート」④のデータ（1）にすぐ続く部分に**Ｎ・Ｂ**として存在。以下の二つが「創作ノート」のみに見られる描写である**】**

◎ ［婚約者の肖像画を］ソーニャに渡す。

◎「彼女［ナターリヤ］が、僕［ラスコーリニコフ］に、君［ソーニャ］のことを予言してくれた」

《メモ》ナターリヤの肖像画を、ラスコーリニコフは大切に隠していたのだ。ドストエフスキイの当初のプランでは、このナターリヤとソーニャとを、ラスコーリニコフ自身が繋ぐ計画であったことがハッキリと分かる。最終的には二人の女性の直接的関係への言及は表面から消えた。しかし、ナターリヤという存在がソーニャの影に隠れ、ラスコーリニコフの心の奥深くに一層後退することで、むしろ人物像にも作品にも奥行きが増したように思われる。或いは、この方向では話が余りにも複雑になり過ぎることを怖れて、ドストエフスキイはナターリヤのテーマを後退させたのであろうか？ 前者の可能性の方が高いと思われる。

　ラスコーリニコフは、自分が漠然と心に育みつつあった「理論」・「あのこと」を拒否する具体的な人物を、身近に婚約者の形で持ち、しかもその背景にある価値観［「乞食への喜捨」と「修道院」で象徴される価値観］との対決を、更にはナターリヤの独特の［「へりくだった」「謙遜な」］人格との対決を、意識的或いは無意識的にも、日々強いられることになったのであろう。このような下宿生活、婚約生活をラスコーリニコフは二年間にわたって送ったという事実を、我々は見過ごしてはならないであろう。ここには、ソーニャへの前史たるナターリヤ、そして彼女との生活史と、そこにあったであろう隠された思想史的ドラマが確かに存在している。［「あのこと」については、この後の《考察》を参照］

「屋根裏部屋に向かうラスコーリニコフ」（Raskolinikov montant chez lui.）
Dmitri クマリーノフによる『罪と罰』の挿画 （“DOSTOÏEVSKI”、Hachette、1971）

《考察》

ラスコーリニコフの母が息子の住む屋根裏部屋を「棺」のようだと評するのは、上に挙げた「テキスト」④の悲しい会話の直後のことである。この「棺」という表現が象徴するように、ラスコーリニコフの住む下宿は、『罪と罰』を支配する雰囲気の陰鬱さを象徴し、ナポレオンの亡霊がさ迷い歩き、主人公の暗い運命を象徴する空間そのもののように思われて来た。しかし既に見たように、この作品随一の健康な生命力とバランス感覚の保持者ラズーミヒンの観察を介して、ひとたび婚約者のナターリヤを始めとして、その母親ザルニーツィナ婦人や召使のナスターシャたちに焦点が当てられる時、この下宿空間には爽やかな空気が流れ込み、ここが最終的に「老婆殺し」の不吉な最前線・「棺」に転じる前は、逆に「春の夢」とも呼ばれ得る明るい生命力と青春の光に溢れた空間であった可能性も開けて来るのである。

この視線を確かなものとするためには、まずザルニーツィナ婦人に注意を払っておかねばならない。ラズーミヒンが誇張して面白おかしく表現する彼女は（「テキスト」②）、ともするとただ淫乱な「羽布団」、「触れなば落ちん」という風情の肉感的な美貌の未亡人という印象を与え、少なからぬ男性読者から、その当人の志向と願望とを交えて（？）、一定方向でのイメージ化がなされがちである。しかし、「テキスト」を注意深く読めば、彼女の内にはいわゆる「女」としての魅力と共に、驚くべきほどの貞淑さと無垢さとが潜むこと、この女性の魅力とは、むしろそのプラトニックなドン・キホーテ的志向性と、女としての美しさとのアンバランスな同居にあることが、ごく自然に浮かび上がって来るのである。健康なバランス感覚の持ち主であるラズーミヒンは、そのような彼女のありようとこの家のユニークさとを、ラスコーリニコフを看病する数日間で見事に見抜いてしまったのだ。ラズーミヒンが友人の医師ゾシーモフに向かって、ザルニーツィナの魅力を説く場面は、この作品随一の健康なユーモアに溢れた場面と言えよう。

ラスコーリニコフは他ならぬこのザルニーツィナの家に下宿をし、その娘ナターリヤの婚約者として二年間を過ごしたのだ。また裁判の場では、婦人とラズーミヒンとが重ねてラスコーリニコフの「善行」について証言をする（火事場での子供の救出、貧困と病の底に沈む旧友とその父への葬式に至るまでの援助）［エピローグ、一］。これらの事実をも考慮に入れる時、ザルニーツィナ婦人宅に下宿をしていた頃の法科大学生ラスコーリニコフを、「ナポレオン理論」に取り憑かれ、ただただ「老婆殺し」の計画にのめり込んだ、陰鬱で孤独な「棺」の住人だったというイメージ一色で塗りつぶすことは早計であろう。「老婆殺し」とは、飽く迄も彼の「理論」の最終的な行き着き先なのであり、むしろ彼の「一切か無か」の危険なラディカリズム・「ナポレオン理論」とは、誰もが善意と愛情とに溢れた下宿空間の内で胚胎し育まれた、文字通りの「理論」であり、ラスコーリニコフ自身の言葉で言えば「春の夢」だったと見るべきではなかろうか？ 妹のドゥーニャに対し、彼は「あのこと」について婚約者と「多く語り合った」と述懐し、婚約者はそれに「賛成しなかった」とも打ち明けている。出会いからナターリヤの死までの約二年間、この間しばしば二人の間で交わされた「あのこと」が、ただひたすら「老婆殺し」の類を巡っての陰鬱で深刻な会話であったとは考え難い。そこにあったものとは、むしろラスコーリニコフの「理論」・「あのこと」を巡って、若い二人が理想主義をぶつけ合う激しく熱い議論であり、それは青春の光と香気とに満ちた、正に「春の夢」であったと考えるのが自然であろう。

二人の婚約期間が二年。婚約者ナターリヤの死と、それに伴うラスコーリニコフの生活の激変（ここに「ナポレオン理論」が位置づけられよう）から犯行までが一年。また、彼の心が最終的にたまたま「老婆殺し」に焦点を合わせるのは、犯行からわず

か一カ月ほど前のことである。改めてこれらの期間の正しい遠近法と、ザルニーツィナ婦人の下宿空間で展開したドラマを視野に入れた、新しいラスコーリニコフ像の造型が望まれる。

次に改めて注目しておきたいことは、婚約者ナターリヤの存在の重さである。ラスコーリニコフは上京し下宿するや、直ちに彼女と婚約をした。この事実自体が既に十分に、ナターリヤにドストエフスキイが託そうとした「電荷」の大きさを窺わせる。しかし彼女の命は儚かった。その外見は母親とは対照的に「醜く」、その性格も「風変りな」ものであったという。おまけに「病弱」な彼女には、場合によっては「せむし」とか「びっこ」という肉体的ハンディまでが付与されようとしていた。このように徹底的に積み重ねられたマイナス要因を背景として、彼女の内面は「へりくだった」「謙遜な」もの、「然るべきもの」を持つ存在とされ、更に何か「胸を打つ」スケッチさえも作者によって準備されていたのだ。これに日頃の「乞食」への喜捨と「修道院」入りの願望とを加えれば、ここにはソーニャに先立つもう一人のユニークで精神的な女性存在、敢えて言えば一人の市井の「ユロージヴァヤ」、ドストエフスキイ的「女神」誕生の微光が射し始めていると考えても間違いないであろう。「創作ノート」⑤から明らかなように、ソーニャと彼女との間の直接的連関を示す要素は最終的には消去される。だがそのことでナターリヤは、彼女の性格に相応しい、この小説の控えめな影の存在に成り遂げた。彼女は、その早すぎる死という薄幸の運命と引き換えに、この小説に一層の奥行きと魅力を増し加える「隠れた女神」の地位を得ることになったと言えよう。

最後に、ナターリヤが「乞食」に好んで施しをしていたという事実にも焦点を当てておきたい。そもそも「乞食」という存在が持つ象徴性は、普通、体制や人の世から閉め出され疎外された人生の敗者、「余計者」という属性の内に最も顕著に見出されるであろう。そしてこの存在は、人間の作る歴史が結局は「天才か、その素材か」という二者択一の問題に帰すと考えたラスコーリニコフの、あの「ナポレオン理論」が直接生み出す一つの論理的帰結とも言えるのである。つまりラスコーリニコフの理論からすれば、「乞食」の存在とは、「天才」になれなかった「素材」たちの、この世における疎外体・なれの果ての姿ということになるのだ。「あのことをも多く語り合った」という二人は、「乞食」の存在を巡って何を語り合ったのだろうか？ 「乞食」に喜捨を続けたナターリヤ。その一方で彼女の死後、故郷の母のことを「乞食同然」と心を痛めつつ、ナターリヤの家に居候を続けたラスコーリニコフ —— 或いは「ナポレオン理論」とは、婚約者ナターリヤの「乞食」への喜捨の姿に触発され、またはそれと相呼応して、ラスコーリニコフが（「乞食同然の母」をも含めて）人生の敗者に感じた心からの「憐憫」と、そこから生じた歴史と人間社会が孕む不条理への「憤

怒」の結晶と言えないこともないであろう。とまれ、「乞食」への喜捨を繰り返し、「修道院」への夢を育みつつ、ナターリヤは早過ぎる死を迎える。そして彼女の死後ラスコーリニコフは、急坂を転げ下りる「ゲラサの豚群」さながらに、悲劇的かつ醜悪な「理論の帰結」へと突き進んでいったのだ。我々が『罪と罰』の冒頭で目にするものとは、ナポレオンの亡霊という悪鬼に憑かれ、「老婆殺し」の最後の瀬踏みに赴きつつある、ラスコーリニコフの横顔に他ならない。

ラスコーリニコフとナターリヤ。二人が二年間見続けた「春の夢」は儚くも消え、『罪と罰』の背景に去った。しかしそれは、人間と世界とその歴史に対し「一切か無か」の刃を突き付ける青春のラディカリズムとして、この作品の背後から、今もなお激しく鋭い「永遠の問い」を我々に迫り続けていると言えよう。

（了）

[★]

ラスコーリニコフとナターリヤの婚約が持った意味について、召使ナターリヤの角度から考察したものが、本論を土台として書かれた「異聞・『罪と罰』、召使ナスターシャの回想」である（「ドストエーフスキイ広場」No. 8、ドストエフスキイの会編、1999）。

この「異聞」は、「テキスト」と「創作ノート」から集められた基礎的なデータは動かさず、その上で自由に想像力を働かせ、ザルニーツィナ婦人宅の召使ナスターシャの視点から、今回扱った人物たちや問題を、改めてどのように見ることが可能かを追ったものである。設定は、予審判事ポルフィーリィの勧めで、召使のナスターシャがラズーミヒンに対し、自分が見たナターリヤとラスコーリニコフの交流について、自由に語るという形にした。このことによって、ナターリヤとソーニャ二人を結ぶ線がハッキリと浮かび上がり、しかもこの線上にいるラスコーリニコフと、その「ナポレオン理論」を理解する新しい視点が獲得されるように思われる。（→ 次ページ参照）

次回の「ドストエフスキイ研究会便り（２５）」について

★次回は、前ページの[★]で記した「異聞・『罪と罰』、召使ナスターシャの回想」を掲載します。主人公ラスコーリニコフが下宿したザルニーツィナ婦人宅の召使ナスターシャ —— この善良な召使に、婦人の娘ナターリヤと下宿人ラスコーリニコフの婚約と交流は如何なるものとして映っていたのかを始めとして、彼女の視点に沿い、『罪と罰』へのアプローチを図る試みです。

これは二十年前、私が『罪と罰』と取り組んでいる中で試みたデッサンの一つですが、ここではまずはテキスト自体を正確に抑えた上で、何処まで自由な考察が可能か、実験を試みました。

★なお次回は、新約聖書の「善きサマリア人」のテーマが登場します。これは以前、『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャや、『罪と罰』のソーニャを扱った際に、「実行的な愛」や「一本の葱」・「キリストの愛」として取り上げたテーマと重なり、ドストエフスキイに於けるキリスト教思想、更には彼のイエス・キリスト像の根底をなすものと言えるでしょう。

次の１５ページに、ルカ福音書から該当部分を引用しておきます(十章 25-29、30-37)。これを参考にして、キリスト教精神の「精髄」と言われるこのエピソードと取り組み、ドストエフスキイが『罪と罰』に於いて、「善きサマリア人」のテーマをどのように用いたかを理解する手掛かりにして頂ければと思います。

★なお次回は、ゴッホが最晩年に描いた「善きサマリア人」(1890)も掲載し、皆さんに絵画芸術の角度からもこのテーマにアプローチをして頂こうと思います。
前回掲載した「ラザロの復活」とも併せて、ゴッホが新約聖書、殊にイエスと如何に向き合っていたかを考えて頂ければと思います。 文学と芸術と哲学と宗教 —— これらを一つにして、人間と世界と歴史、更には超越世界について考えることが、この四十年間、ドストエフスキイ研究会が取ってきた基本的な学習の姿勢です。

《参考資料》

「善きサマリア人の譬」　　—ルカ福音書から—

すると見よ、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試みようとして言った、「先生、私は何をしたら永遠の命を嗣(つげる)のでしょうか」。イエスはしかし、彼に対して言った。「律法には何と書かれているか。あなたはどのように読んでいるか」。すると彼は答えて言った。**「お前は、お前の神なる主を、お前の心を尽くし、お前のいのちを尽くしつつ、**お前の想いを尽くしつつ**愛するであろう。また(お前は)お前の隣人をお前自身として(愛するであろう)」。**するとイエスは彼に言った。「あなたはまともに答えた。それを行いなさい、そうすれば生きるだろう」。しかし彼は、自らを義としたいと望んでいたので、イエスに言った、「私の隣人とは誰ですか」。

イエスは(この問いを)取り上げて言った、「ある人がエルサレムからエリコにくだって行く途中、盗賊どもの手中に落ちた。彼らは彼の衣をはぎ取り、(彼を)めった打ちにした後、半殺しにしたままそこを立ち去った。すると偶然にも、その道をある祭司がくだって来た。しかしその人を見ると、(道の) 向こう側を通って行った。また、同じように一人のレビ人も(現れ、)そのところへやって来たが、(その人を)見ると、(道の) 向こう側を通って行った。さて、あるサマリア人の旅人が彼のところにやって来たが、(彼のあり様を見て)断腸の想いに駆られた。そこで近寄って来て、オリーブ油と葡萄酒を(彼の傷に)注いでその傷に包帯を施してやり、また彼を自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行って、その介抱をした。そして翌日、二デナリオンを取り出して宿屋の主人に与え、言った、「この人を介抱してやって下さい。(この額以上に)出費がかさんだら、私が戻ってくる時あなたにお支払いします」。この三人のうち、誰が盗賊どもの手に落ちた者の隣人になったと思うか」。

すると彼は言った、「彼に憐れみ(の業)を行なった者です」。するとイエスは彼に言った、「行って、あなたもまた同じようにせよ」。

ルカ福音書第十章 25-29、30-37

(新約聖書翻訳委員会、佐藤研訳、岩波書店、1996)